

Love has just begun.

It will be stronger and never die ...

はじめに愛があった。

明けておめでとうございます



理事長
永見 憲吾

皆様方にはお元気で新年をお迎えのことと、心よりお慶び申し上げます。
シャレー群であるナーシングホームシャレーは2024年度より全国からユニットリーダーを受け入れる「ユニットリーダー研修 実地研修施設」として広島県で初めて認定されました。
ユニットケアの行動指針は、「その人の立場に立って行動する」ことです。一人ひとりに寄り添い、思いを叶え、その人らしい生活を営むことが出来るよう支援する「個別ケア」の実践こそがユニットケアであり、尊厳を守るケアなのです。
ハード面では、「自分の住まい」として施設らしくない施設づくりが必要です。
ソフト面では、職員教育の徹底。特に虐待防止、身体拘束、認知症ケア等は必須の研修です。実地研修施設では「業務」という言葉はマッチせず、一日の生活スタイルは一人ひとり異なり、個々の思いに沿ったケアを行うことは、共に生きることであり、そこに必要な当施設の行動目標である「目配りと気配りと思いやり」を持ち合わせた職員が求められています。
このシャレー施設群にとどまらず、IGL施設群全体にこのような気持ちでケアが出来るように今年も頑張っていきたいと思えます。
さて、今年も元旦に中国新聞のLEADERS倶楽部に記事が掲載されましたので、こちらに紹介させていただきます。
本年も皆様のご支援とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

各施設群の代表に「本年の抱負」を聞きました



ゆうゆう群管理者
永見 悠騎

「IGLの夢、それは乳幼児から高齢者に至る人生の理想郷づくり」
目まぐるしく物事が変わっていく時代・社会環境の中で常に『夢』を忘れず一歩一歩邁進してまいります。



シャレー群管理者
渡辺 正子

「現状維持は衰退」好きなことばです。
仕事も私生活も「新しいことへの挑戦」をこれからも楽しんでいきます。



ベル群管理者
河野 隆典

2025年は、「高齢者の急増」が「現役世代の急減」への局面を迎える年です。
「現役世代急減予防策」を練り、「介護の働き甲斐づくり」に注力します。



専門学校校長
本廣 淳範

本年も6学科の学生全員の夢を実現するために、教職員一同はきめ細やかな教育活動を全力で推進します。



こども園学園長
宮田 美智子

一人ひとりみんな違う子どもたちが、自分で選び、決断し行動する。子どもも大人も人としての尊厳が守られる。これがサムエルの教育の基本です。

IGLの今、これからの夢

北欧発祥で野外で活動する「森のようちえん」構想が進みます。

自然と触れ合う機会の少ない現代の子どもたちに本物体験をさせたいと、広島市安佐北区後山の山地約1万6,500平方メートルを整備中です。木々が茂る丘に遊歩道を設け、ツリーハウスなどを計画しています。2025年内に一部をオープンさせ、グループの認定こども園の園児たちに活用してもらいます。四季折々の自然の中で虫取りをしたり、木の実を拾ったり、遊びを通じて園児の健やかな成長を促します。近くの広島市安佐動物公園と組み合わせた遠足などを企画したいですね。



IGL医療福祉専門学校(安佐南区)は多くの専門職を地域に輩出しています。

歯科衛生士や介護福祉士、鍼灸師、柔道整復師の資格取得を目指す医療福祉4学科の卒業生の多くが広島県内で就職しています。ただ、広島県は転出超過数が3年連続で全国最多となり、中でも若年層の流出が目立ちます。今後は県北の学生のUターン就職が進むよう、交通費の補助など自治体との連携を模索したい考えです。



歯科衛生学科卒業生 小野さん



介護福祉学科卒業生 劉さん

外国人の活用に積極的です。

介護の即戦力として2025年1月、特定技能の在留資格を持つインドネシア人13人を受け入れ、グループの高齢者施設に配置します。外国の技能実習生は以前から受け入れており、日本の介護福祉士や看護師の資格を取って働き続ける人もいます。大変優秀です。人口減少が進み働き手が不足する中、外国の方の力もお借りしながら介護の質を維持します。

IGL医療福祉専門学校(安佐南区)の日本語学科は中国、ベトナムに加え、近年はネパールの留学生が増えています。2025年度の定員は過去最多の300人に増やす予定です。



ネパールの留学生(2024年学園祭)

IGLのこれからの計画について

グループホームゆうゆう(安佐北区)は開所から20年以上がたち建物の色あせが目立ってきました。外壁の塗装と修繕を始めとして2025年2月末に完成予定です。

グループ本部(安佐南区)の空き施設を活用して、放課後等デイサービスなどができないか検討中です。敷地内の施設にはリハビリができる理学療法士や作業療法士もいます。人材確保に課題はありますが、障害のある地域の子どもの受け皿づくりに取り組みたいと思っています。

